

生まれたらミリムの親
友になれた件

骨人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—— 『私』は退屈だった。

—— 『私』は外を知りたかった。

—— 『私』は自分が何であるか分からなかった。

—— だから『私』は外に出ることにした。

—— そして『私』は少女と出会う。それが運命の始まりだった。

目次

運命への反逆

プロローグ	1
旅に出る。そして運命の出会いをする。	7
どうやらもう一仕事しなければなりません	14
『私』は名を得る。	23
『私』は故郷へ帰る	29
魔王への進化	34
『私』は土地を手に入れました	37
魔王達の宴	45
勇者襲来	49
悲しみの再会	57

プロローグ

…暗い、暗い『何か』の中で、『私』は漂う。……退屈だった。こんな世界でただただ漂うだけ、『外』に出てみたかった。『私』は外という物が存在する事を知っていた。しかし出る事は出来なかった。そしていつか外に出る事を考え時間を潰し、永い時が経った。……光が見えた。『私』は光を追いかけられるように進んだ。そして、『私』は光に触れる。すると触れた先から感覚が無くなっていった。自分の全てを光が包んだ時。

……『私』が消えていくのを感じた。そう……これは——

「……………んん……んんは……」

私が目を覚まし、まず周りを見渡す、私の知らないもので溢れている。私はコレがなんであるかを考えた

《ユニークスキル【マナブモノ学習者】【ミツメルモノ観察者】【チエアルモノ知恵者】を取得しました》

私はその何か…植物？というのだろうか？それに触れてみた。

「…何も起こらない、無害…という事でしょうか？」

さつき頭に響いた声と関係あるのだろうか？私はスツと目の前の物や状況を理解出来るようになっていた。

「……ここは何でしょうか？……そもそも私が居る場所は何なのでしょう？」

一人思考を続ける。しかし答えは出ない。

「……考えても仕方ありません。移動しましょう」

私は移動する事にしました。

「……なんでしよう……この不快感は……」

長い間歩いてしていると自分の体が怠くなり、喉に痛みが生じる。

「……どうにかしなければ……あれは」

それは動物だった。白い玉のような姿をしている。ソレは透明な物が溜まった場所で、それを飲んでいた。

「……あ」

私はフラフラと近づくと

「……キュ？」

すると動物は振り返り、私を見つめる。

「……すいません、それを飲ませてくれませんか？」

すると私に背を向け、動物は去って行った。：飲んでもいいという事なのだろう。「っ、はあ……」

私は無我夢中で透明な物を飲む、喉のへばりつくような感覚が無くなった。私はこの透明な物を飲めば癒せる、という事を学んだ。そしてこれが水というものである事も学んだ。

「はあ……これから、どうしましょうか……」

辺りを見渡すと私に興味があるのか、動物達が木の陰から見つめていた。

「……しばらく、ここに居ましょう」

私は立ち上がり、動物達に近づく。すると何かが目の前に浮かんだ。

ステータス

名前：無し

種族：キララビット

称号：なし

魔法：なし

技能：なし

耐性：なし

「これは……」

私は目の前に現れた物に対して考える。私が見つめていたのはどうやらキラキラ
ビットというらしい。興味を持った私は残りの動物達をみる

名前：無し

種族：ブラックベアー

称号：なし

魔法：なし

技能：なし

耐性：なし

名前：無し

種族：レッドバード

称号：なし

魔法：なし

技能：なし

耐性：なし

「……なるほど、つまりコレは相手について分かる、という事ですか」

それなら自分についても分かるのでは？と自分を見ようとしたが……そもそも自分を見る事が出来ない

「……どうしましょうか……、ん？そういえばこの場所……」

私は振り返り水を見る。そこにはさつき見た動物達とは違うものの姿が映っていた。長く光に反射して銀色に見える髪、琥珀色の瞳、そして頭の上に生えた動物のような耳……そんな姿に対して意識を集中する。

名前：無し

種族：人狐

称号：なし

魔法：なし

技能：ユニークスキル【マナブモノ学習者】

ユニークスキル【ミツメルモノ観察者】

ユニークスキル【チエアルモノ知恵者】

ユニークスキル【ノロウモノ呪詛者】

耐性：空腹耐性

口渇耐性

「これが私……という事ですか……」

旅に出る。そして運命の出会いをする。

私はしばらく森に留まる事にした。動物達に様々な事を学ばせて貰い、時に争い、共に笑い、そして死という別れも経験しました。そして日の登り沈みの回数が1000を超えた時、私は決心しました。

「……皆さんに話があります。私はここを出ようと思うのです」

「ガウウ……」

「キュイ……」

私が出て行くと言った時、動物達は行かないで、と私を止めました。しかし私はもっと広い世界を知りたいのです。……私も悲しいですが

「大丈夫です。皆さんと私は繋がっています。どこに居ても、私たちは仲間です」

「ガウ……」

するとブラックベアが私に何かを渡してくれました。どうやら木の実を沢山くれるようです。

「ありがとうございます」

「キュイ！キュイキュイ！」

キラララビットは私の足元を突くと口に啞えた物を足元に置ききました。

「これは……何でしょう?」

何かを入れる物でしょうか? かしらそれにしては口の部分が小さいですね。これでは木の実すら入りません

「…何でしょうか、コレは?」

「ガウ」

するのブラックベアがヒョイとそれを持ち、水の溜まり場へと向かいました。

「ガウ、ガウウ」

するとそれを水の溜まり場へと沈めました。

「ああ、なんて事を…」

しばらくすると引き上げ、私へと突き出します。

「ガウ」

「……持てという事でしょうか?」

私は持ってみました。すると中に何かが溜まっていました。

「……なるほど、これは水を溜めておく物、という事ですか。ありがとうございます」

「キュウ!」

その後、私は動物達から抱えきれない程の木の实を貰いました。そして私は彼らに別

れを告げ、森を出る事にしました。

「さてと…行きましようか」

私は森の外へと足を踏み出しました。

私は道なき道を歩き、三日かけて自然な物では無い何か見つけました。

「何でしようか？」

私は興味を持ち、足を踏み入れました。

「グガアアア！」

そこでは少女が雄叫びを上げながら暴れ回り、それを紅い髪の青年、そして神秘的な姿をした女性が必死に止めていました。

「だ、大丈夫ですか!？」

「何しに来た!ここは危ない!下がれ!」

「え、ちよつ!?!なんでこんな所に生き残りが居るの!？」

すると少女がこちらへ振り向き、襲いかかって来ました。

「ガアアア！」

「つ、くつ、仕方ありません…」

私は少女が振るう拳をストレスで躲すと、少女を掴みました。森でブラックベアが暴

れた時、こうして掴み。正気に戻す方法を私は知っています。

「お前死にたいのか!? 離れろ!」

「大丈夫です。正気に戻って下さい! はああ!」

私は少女を思いつきり投げ飛ばし近くの岩へ叩きつけました。

「グカアア!」

「……へ?」

「はあ!」

驚く二人を放置し、私は少女の元へ向かいます。

「グルウ……!」

どうやらまだ正気に戻っていないようです。仕方ないのでもう一度…

「ガア!」

すると少女は私の掴みを警戒してか、岩を投げてきました。

「ふっ!」

迫る岩など私にとっては障害にすらなりません、しかし本当の目的を私は知ることになります。

「ガウウ!」

「っ、ゲホッ!」

岩を拳一発で砕いた私は、その後から来る少女に対応出来ませんでした。そのまま腹に蹴りを打ち込まれました。体中から肉が裂ける音と骨が砕ける音がしましたが、体を癒す事に集中しながら吹き飛びました。そのまま岩へとぶつかりますが止まる事無く飛び続け、地面にめり込む形で収まりました。しかし至る所から激痛が走り、自己治療でも間に合うかどうかといった具合です。

「っ……しまっ……」

しかしそんなスキを見せてしまえば追撃は喰らいます。少女は私へと突っ込み、そのまま拳を叩きつけます。より一層地面にめり込み、私は体がこのまま引き千切れると思えました。しかしどうにか治療が間に合い、私は何とかスキについて離脱します。

「……ゲホッ」

ですがやはり痛い、彼女の一撃一撃は致命傷になりかねません。

「ちよつと、アンタ大丈夫？」

女性が私を心配するように来ました。

「ええ、森の動物達との戯れよりも大分強いですが……大丈夫です」

「いや、アンタのいた森の動物達よりもあの子の攻撃を受けて生きてる貴方の方が驚きよ……どうしたらそんな風になるの」

「それについては分かりません」

「おい。お前、ミリムの攻撃を受けてよく生きてるな」

「ミリム？それが彼女の名前ですか？」

「ああ、そうだ。アイツはペットのドラゴンを殺されて怒ったんだ。それでこの国を滅ぼしたんだが、それでも止まらなくてな…俺たちでなんとか鎮めようとしてるんだが」

「そうだったんですか…なら…私に任せて下さい」

「……出来るのか？俺達でも止まらなかつたんだぞ」

「ええ、友達との別れは私もよく分かります。だから、私が止めます」

そう言つて私は立ち上がり、ミリムさんへ振り返ります。

「ミリムさん！確かにドラゴンを殺されたのは許せないですし、怒るのも分かります！ですが、こんな事をドラゴンは望んでいません！」

「ガアアア！」

するとミリムさんは私目掛けて突っ込んで来ました。

「ツグウ…!？」

私は突っ込んで来るミリムさんをそのまま受け止め、抱きしめます。

「…グツ…：大丈夫です、別れは悲しい事ですがいつかは受け入れなくてはなりません」
私は宥めるようにミリムさんへ語りかけます。しかし腕の中で暴れるミリムさんに

腹や腕、足などをへし折られますが。そんなのは関係ありません。この子はただ、友を失って悲しんでいるだけなのですから

「そんなに……悲しいのなら……私が……貴女の……友達になりますから……」

血反吐を吐きながら、私はミリムさんを宥めるように折れて痛む腕でミリムさんの頭を撫でます。

「ガア……グウ……」

徐々にミリムさんが暴れる動きが鈍くなって来ました。恐らく、もう少しでしょう。そしてしばらく我慢して撫で続けました。すると全く暴れませんでした。ミリムさんを確認すると寝息をたてて眠っていました。

「よかった……です……」

私はその姿に安心しました。すると意識が遠のき始めました。どうやら緊張の糸が切れたようです。

「おい!？」

「わわっ?!何この怪我?!早くしないと死んじゃうわよ!？」

慌てる誰かの声を聞きながら私の意識は無くなりました。

どうやらもう一仕事しなければなりません

「う、ううん…」

意識を無くした私が次に目を覚ましたのは石で作られた人工物の中でした。

「……は…」

「起きたのか!」

「うわっ!」

すると私のちょうど真上からミリムさんが顔を覗かせました。私はびっくりして顔を上げてしまい、ミリムさんの額と私の額がぶつかってしまいました。

「い、痛いのだあ…」

額を抑え、涙を流しながら蹲るミリムさん。

「すいません」

私は謝罪しました。元々は私が起き上がったからですし。

「うむ、特別に許してやるのだ!」

「ありがとうございます」

すると奥から紅い髪の青年と小さな少女が出てきました。

「お、治ってるんだな」

「良かったああ…あの薬草が効いたのね」

そう言う二人に疑問を持ち、私は自分を改めて観察しました。

至る所に布が巻かれており、私は身動きが取りづらい理由はこれか、と気づき外そうとしましたが

「ダメダメ!?今取ったら傷口が開くわ…よ?」

「……お前、何者だ?だった一晩で傷が治りやがった」

彼らが言う通り、私の体には傷が一切無く、元のままでした。折れた腕や足も問題無く動いており、私は治りの遅さに驚きました。それほど私は重症のようでした。

「お前が助けてくれたとギイから聞いたぞ!ありがとうなのだ!」

「あ、いえ、私も友達である動物達の死を目の当たりにしていますから…怒る気持ちも分かります」

「そうなのか?」

「ええ、……そう言えばお二人の名前を聞いてませんでしたね」

「ギイだ。ギイ・クリムゾン」

「ラミリスよ!」

「ギイさんにラミリスさんですね。私の怪我を治してくれてありがとうございます」

そうやって私はギイさんとラミスさんに頭を下げました。

「礼はいい、それよりお前に興味がある」

「そうね」

「私に……ですか？」

「二人はどうやら私に興味があるようです。」

「まず……お前、名はあるか？」

「名前ですか……？ありませんけど」

「ええ!?!名前無いのにあの強さ!?!」

名前が無い事に驚くラミスさん。そんなに驚くことでしょうか？

「お前、『たかだか名前だろ?』って思ってるな?じゃあ聞くがお前が居たという森に名前を持った者は居たか?」

「ええっと、私が名付けたキララビットのキュイとブラックベアのグランなら居ますか……?」

そう言うのと呆れたような表情をするギイさん

「お前、名前付けた時に何か無かったか?」

「……そう言えば、少し体が重かったですね」

「……」

「……」

「ん？どうかしたのか？」

黙る二人とそんな二人を見て首をかしげるミリムさん。そんなに重要な事でしょうか？

「…名付けはな、いわば自分の力の一部を譲渡する事だ。お前はそれを平然とやったんだぞ？」

「はあ…？それと私の名前が無いことに関係があるんですか？」

「それじゃあ聞くけど、そのキュイとグランに何か変化はなかった？」

ラムリスさんが私にそう問いかけます。

「確かにキュイは毛並みが綺麗になつてスピードも増しましたね。グランは毛並みが黒から灰色に変わつて重い岩の山をたつた一回で運ぶようになりましたし」

「……逆にその不自然さに気付かないの？」

「ええ、『少し成長したんだな』程度に考えてました」

すると二人はため息をつきました。しかし聞かれた通りなら……

「あれ…？つまりミリムさんもギイさんもラムリスさんも強いって事ですね」

そう言う私に『やつと話が飲み込めたか』とホツとするギイさんとラムリスさん

「つまり、お前は名前が無い状態でミリムの攻撃に耐え、宥めたんだぞ？そんな異質なヤ

ツなんだ。俺たちが興味を持つのは普通だろ？」

「そうよ、それに名前が無いのにその強さ…普通じゃないわ」

「そうなのだ！あの時の私を止めたお前は凄いのだ！」

「そうなんでしょうか？」

「そうだろ、俺ですら止まらなかつたんだぞ？」

「そうよ、私達が苦戦したのにあんなにあつさり止めてくれちゃって……まあ、被害が増えなくて良かったけど」

「ええつと、もう怪我也治ってますし、いつまでもここに居ても邪魔になりますからそろそろここを出たいのですが」

と三人に申し出ると

「それはダメなのだ！」

なぜかミリムさんに止められました。

「何故ですか？」

「今出ではダメなのだ！私のペットのガイアが暴れているのだ！」

「ペットって亡くなってしまうたミリムさんの？」

「そうなのだ！死んだと思ったら蘇ったのだ！でも私以外に攻撃するのだ！だから今外に出たら危険なのだ！」

そうまくし立てるミリムさん、必死そうにそう言う姿に私は

「分かりました、ミリムさんのペットを宥めてき……」

「「ダメに決まつてる（だろ！・でしょ!?!・のだ!）」」

三人が息ぴったりでそう言いました。

「ですが止めないといけないのでしょうか？」

「そうなのだ……ワタシはガイアを傷付けたくないのだ……」

「なら傷付けずに正気に戻す方法があります」

そう言う私にギイさんが言いました

「本当か？いくらお前でもアレは止められないぞ？」

「大丈夫です。少し外に出ます。必要な物がありますから」

「え、ちよつと!？」

私は外に出て木を探しました。

「良かった、ここに生えてましたか……」

私はその木の葉っぱを二、三枚千切りました。

「……そんな葉っぱで宥めるって言うのか？」

「無理よ、そんなのじゃ……」

「大丈夫です、ガイアさんの所へ連れてって下さい」

「ガアアア！」

そのドラゴン腐敗しており、空を飛びながら無作為に炎を吐き、森を燃やし、急降下して地面を砕いたりと暴れていました。そしてその衝撃で腐敗した肉や皮が落ち、辺りに腐った匂いが漂っています。

「それでは、鎮めます」

私は口に木の葉を当て、息を吹き込みました。

すると静かな……それでいて聞いてて心が晴れるような、そんな音色が辺りへ響く。

「これは……」

「いい音色ね……」

「癒されるのだ……」

すると暴れていたガイアさんは私を見つけると急降下して来ました。

「っ、ガイア！止まるのだ！」

ミリムさんの声も聞こえてないのかそのまま降りてくるガイアさん。すると私の目

の前で地面に降り立つと静かに音色に耳を傾けていました。

「グルル……」

「……これは」

ガイアの足元から徐々に淡い光が出ていました。そこから徐々にガイアは消えて行く

く
「何故なのだ!? 正気に戻すのでは無かったのか!」

私に泣きながら摺みかかるミリムさん。しかしそれでも私は演奏を辞めずに吹き続けました。

そしてガイアさんは淡い光となって天へと登って行きました。

「どういう事なのだ……?」

ミリムさんは地の底から響くような声で私を睨みます。

「お前は、ワタシのペットのガイアを正気に戻すと言っていたのだ、なのにガイアは消えたのだ……嘘をついたな?」

「いえ、嘘ではありません」

「……巫山戯るな!」

そうキツパリと言う私に起こったのかミリムさんが殴って来ました。スレスレで避ける事も可能ですが、私は受ける事にしました。またゴロゴロと地面を転がります。

「お前には感謝してるのだ。……でも、それでも約束を破るやつは許さないのだ」

そう言つてミリムさんが脚を上げ、私の顔面を砕かんとする寸前。

「キュイ！」

パタパタと小さな白いドラゴンがこちらへと飛んできました。

「キュイキュイ！」

ミリムさんへ抗議するように鳴く白いドラゴン。

「……まさか、ガイアなのか？」

「キュア！」

「ガイア、ガイア……良かったのだああ！」

そう言つとガイアを抱きしめるミリムさん。私もホツとしました。

「……暴走したミリムを助けて、ガイアを新しく生まれ変わらせるなんて……」

「へえ……コイツは面白えじゃねえか」

私とミリムさんがガイアの復活を喜んでいる中、ラミスとギイはますます彼に対して興味を持つのでした。

『私』は名を得る。

「本当にありがとうなのだ！」

そう言つて私に抱きつくミリムさん。そんなミリムさんの頭を撫でつつ。私は言いました。

「いえいえ、では私は旅に戻らせて貰いますね」

「待つのだ！」

「グエツ」

ミリムに首を掴まれて変な声のでてしまいました。その声を聞いてラミスさんとギイさんが笑います。

「ははは！グエツだと？笑えるな！」

「ほ、本当ね！ぶ、あははは！」

「あの、笑わないでくれませんか？」

そう言いますが、二人はどうやらハマってしまったらしく、しばらくお腹を抱えてました。

「ワタシはお前に何も返せていないのだ！だから名前を付ける事にしたのだ！」

「え？」

「……え？」

「……へ？」

そう言い放つミリムに固まる私達。

「だから、お前に名前を付けるのだ！」

「いえ、それは分かりますけど……大丈夫なんですか？」

「そ、そうだぞ!? ミリム！ 考え直せ！」

「そうよ！ 考え直しなさい！ コイツは貴女の攻撃に耐えたのよ!? どれだけ魔素を持つていかれるか分からないわ！」

そう言つて諭す二人ですが、ミリムは聞く耳を持ちません。

「うー、一々煩いのだ！ 付けると言ったら付けるのだああ！」

「わ、分かりました！ 分かりましたから暴れないで下さい！」

目に涙を溜めてそう言うミリムさん、私は暴れると思ひ、了承する事にしました。

「なら安心なのだ！ では付けるぞ？ お前の名は……ファルスなのだ！」

そう言うお私の中で変化が起きました。何かが刻まれるような、そんな感覚が

「つ、付けちゃった……ミリムが……」

「おい、大丈夫かミリム？」

「平気なのだ！それよりファルスはどうなのだ？」

そう言つてニコニコと私を見るミリムさん。私はミリムさんに告げました。

「ミリムさん」

「何なのだ？」

「名前を付けて下さりありがとうございます」

「む、むず痒いのだ。いつも通りでいいのだ！それにワタシとファルスは親友なのだ！だからそんな言葉で話さなくてもいいのだ！」

「そうですか……それではミリムさん」

「ミリムでいいのだ！」

「いえ、そういう訳にも」

「ミ・リ・ムで良いのだぞ？」

「……ミリム」

「もう一回言うのだ」

「ミリムさ……なんでもありません」

一度ミリムさん、と言いかけてミリムの拳がプルプルとするのが見えたので訂正します。

「ミリム」

「くく！」

悶えるように動くミリムさ……ミリム。そんなミリムを見てギイさんとラミスさんは

「おい、ミリムってあんなだったか？」

「……いえ、少なくともあんなのじゃなかったわ……」

「むく！二人はワタシを何だと思ってるのだ……！」

そして名前をミリムから貰った私は旅へと戻ろうとした時、ギイさんが私に提案しました。

「なあ、ファルス。訓練して行かないか？」

「訓練、ですか？」

「ああ、今のお前は強い。だがその強さを恐れて人間がお前を殺さないとも限らない。

……人間が今のお前に勝てるとは思えないが、勇者が連れてこられたら別だ。いくらお前でも死ぬ」

「そう、ですか」

「それに……ミリムを宥めたお前の姿を見て戦いたくなつてな」

「……それ、貴方が戦いたいだけなのでは？」

「……うつせーぞ、さっさとやるぞー！」

そうやって構えるギイさん。私も構えます。

「ああ、手を抜いてやるから安心しろよ？ せつかくミリムが目を付けたんだ。ここで死なれちやあ困る」

「はい、よろしくお願いします」

そして私とギイさんは戦いました。

しかしその戦いは1時間程度で終わった。

「おお、凄いのだー！」

「……凄いわね」

そこにはお互い膝をつき、息を荒げる二人が居た。

「ぜえぜえ……お前、最初はボコボコにされてたのに……なんで途中から躲せるようになったんだ？」

「いや……そんな事を言われても……わかりません……よ」

「そうか……お前が魔王になれば……俺も退屈せずに済みそうだ」

魔王という単語を口にするギイに対して私はこう答えました。

「それは……お断り……ですネ」

「そうか……そりゃ……残念だ」

『私』は故郷へ帰る

「それでは、お世話になりました」

私はギイさんとの戦いでの疲れを癒すと再び旅へ戻る事にしました。しかし、私は一度故郷である森に戻る事にしました。少し居なかつただけとは言え、やはり寂しく思っています。

「もう行くのか？送って行くのだ！ガイアもお礼をしたいのだ！」

「キキュイ！」

ガイアさんは私の下へと潜ると一生懸命に翼をバサバサと羽ばたかせて私を運ぼうとしましたが……ほんの少ししか進めませんでした。

「キュウ……」

「ガイアはまだ幼いのだ、大きくなってファールスを乗せればいいのだ！だから今は私が運ぶのだ！」

「キュア！」

ミリムはそう言うと私を抱っこしました。……これは少々恥ずかしいですね……

「それじゃあ行ってくるのだ！」

「おう、早く帰って来いよ」

「いつてらっしやい、ミリム」

「うむ、行つてくるのだ！」

そう言ううとミリムは走り始めました。風圧で私は吹き飛びそうになりましたが、ミリムがその度に飛ばされぬようにフォローしてくれるので助かりました。

「む、そう言えば場所を聞いて居なかつたのだ」

「私の森はミリムが暴れた場所を真つ直ぐに行つた先ですよ」

私はそう説明しました。

「うむ、それなら分かりやすいのだ！それじゃあ、飛ばすのだ！」

「うみやあああ!？」

さつきよりも風圧が強いです…思わず涙が出て来ますが、その涙はガイアが舌で舐めとります。

そしてしばらく風に晒されると

「あそこがファルスの住んでいた森なのか？」

「ええ、それで……っ!？」

私の住んでいた森は、破壊されていました

「ミリム、すいません。下ろしてください。彼らが心配です」

「分かったのだ。でも、ワタシも行くのだ」

「……ありがとうございます」

私は急いで森へ入りました。至る所に動物達の死骸が転がっていました。焦げている肉が挟られていたり、首を切り落とされたりと無残な姿でした。木々も戦闘によつて折れていました

「まさか……そんな……」

私は急いでこの森の奥……私が目覚めた場所へ向かいました。

そこには

「キュイ……グラン……そんな……」

おそらく動物達を護ろうとしたのでしよう。キュイには至る所に斬られた後や火傷があり、傷口から内臓が見えており、そのまま力無く横たわっていました。グランは子供達を守ろうとしたのかその背中には深い傷があり、黒かった毛並みは赤黒くなっていました。

……二匹ともこと切れていました。しかし

「グワアウ……」

「キュウウ……」

「ピー……」

「っ、良かった。生きていましたか……」

小さな子供達は無事でした。おそらく森のみんなが必死に守り抜いたのでしよう。

「ミリム、この子供達を安全な場所に……」

「分かったのだ！フアルスはどうするのだ？」

「……私はしばらくここに居ます」

「……分かったのだ」

私はミリムとガイアに子供達の避難を任せると森のあちこちに横たわっている動物達を集めました。

「……っ、なんで……こんな事に……」

余りにも、余りにもひどい……誰が……誰がいつたいこんな事を……

「ああ？おい、珍しいのがあるぜ」

「マジか獣人じゃねえか!? 高く売れるぜ！これはよお！」

「……何ですか、貴方達は」

人間でした。彼らは各々武器を持ち、私ににじり寄って来ます。

「へッへッへッ、抵抗するなよ？」

まるで値踏みするかのような不快な顔を私に向ける男

「……貴方達はこの動物達について、何か知っていますか」

「ああ？その獣か？近くの国の王様の命令でな、この森を平らにして畑を作る事になっただよ。そしてこの獣どもが邪魔するからよお？殺してやったぜ？」

その言葉を聞いた私は、奥底から沸々と湧き上がる感情が抑えきれませんでした。

「……お前らのせいだ……」

「あ？なんだって？」

「お前らのせいだ……！」

「ちっ、あくまでも抵抗するってか、お前ら！傷を付けるなよ！大事なしよ……」

しかし男の言葉はそこで途切れた。何故なら首を切られたのだから

ドチャリ……と肉が落ちる音がする。

「なっ!？」

「……せめて、この子達が安らかに眠れるように……貴方達を……殺します……！」

《進化条件に必要な人間の魂を確認……不足無し、このまま魔王への進化の行程を続けま
す》

魔王への進化

男の首が切り飛ばされても賊達は平然としていました。

「はっ！俺達を殺すってか？一人やられたが…まだ俺達には大量の仲間が居る！お前がいくら殺そうが勝ち目なんてねえんだよ！行くぞお前ら！」

『うおおおー！』

するどどこに潜んでいたのかと疑う程の賊どもが現れ、私に襲いかかりました。

私は彼らの剣や魔法を受けながら一人づつ殺していききました。

《【痛覚耐性】【熱耐性】【属性耐性】を取得しました》

そして何発もの魔法を受け、剣で切られますがこの程度の傷など、動物達が受けた傷を考えれば些細なことです。

「くっ、なんでこれだけ怪我を負わされても倒れないんだよ!?化け物かコイツは!?おい！魔法使いども！もつと威力の高い魔法を撃ち込まないのか！コイツに剣があまり効かないぞ！」

「無理だ！…この森の獣どもを殺す為に使っているだろうが！それくらい覚えてろよ！

ああくそ！こんな事になるならこんな依頼受けるべきじゃなかったんだよ！」

「うるせえ！死にたくなきや魔法を撃て！」

どうやら賊どもは内輪揉めをしています、そんなのは私には関係ありません。殺すだけです。

「チツ、俺は抜けるぞ！こんな化け物相手に戦えるか！あばよ！」

悪態をつきながら離れていく賊の一人、しかし私が逃すわけがないでしょう。

「おい！待て！ここで逃げたら……」

「はっ！負け惜しみか？じゃあ……ガッ?!」

彼は私に首をへし折られました。その後も泣きながら逃げる者を殺し続けました。

「わ、悪かった！動物達を殺した事は謝る！だから見逃してくれ！」

私が殺したのが100を超えた辺りでしょうか？そうやって命乞いをする者も現れました。しかし、それでも許すつもりはありません

「命を奪ったのですから、自分の命が奪われる覚悟はお有りでしょうか？」

「ひっ、た、頼む！見逃し……」

そう言う彼の首を私は切り飛ばしました。

そうしてどれほどだったのでしょうか？逃げる者を見つけては殺し、襲ってくる者を

殺し、そして見つけては殺しを繰り返し、この森に居る賊どもは全て殺し尽くしました。しかし、私のこの感情が収まりません。

「……そう言えば、この森に賊を送り込んだのはこの近くの王国の王様、でしたか」

私のこの感情はその王様に集中しました。当然です。その王様がこの森に賊達を送り込まなければ、この森の動物達もそしてこの森もこんな被害を受けずに今でも平穏に暮らしていたでしょうから

私は至る所にある賊達の遺体を集め、折れた木々の近くに穴を掘り、そこへ埋めました。これで彼らの肉体はこの森へ還るでしょう。

「……その前に、血を落とさないといけませんね」

私は賊達の血で赤く染まった髪に触れつつ、水の溜まり場へと向かいました。そこで血を洗い流し、服に付いた血も洗い流します。そして少しの乾かし、再び着るとこの森の近くにあると言う王国へ向かいました。

《魔王種【天狐】への進化を開始します…》

向かう途中、そんな声が聞こえましたが、今の私にはどうでもいい事でした。私はただ、動物達の無念を晴らす為に王国に居る王様の首を刎ねるだけなのですから……

『私』は土地を手に入れました

私はその王国へと向かいました。道中には何も起こる事が無く、すんなりと王国の正門が見えてきました。

「あの、入りたいのですが…」

私は門番の男性に話しかけます、

「…ん？ 獣人とは珍しいな、こんな滅ぶ寸前の王国に何か用か？」

「滅ぶ…？」

「ああ、大きな飢饉があつてな。食料がずっと足りていないんだよ。それを聞いた貴族が『森を開拓して畑にすればこの飢饉を乗り越える事が出来ます』っていいやつが勝手に森に雇った傭兵崩れどもを送り込んだんだよ」

そう言う門番、しかしあの賊達は国王の命令と言っていましたか…

「森に攻め入ったのは国王の命令では無いのですか？」

「アンタ、あの森に居たのか？ そりゃ災難だったな。貴族のヤツも森の動物などは好きにして構わないって言ってたからな…よく生きてたな。あの傭兵崩れどもは強さで言うならB+の強さだからなあ…」

「B＋……？」

「ああ、アンタに言っても分からないかB＋ってのは蜥蜴人族リザードマン一体分の強さって事だ」

「私にはよく分かりませんが、そこそこ強いという事ですか？」

「まあ、そうだな。おっと、この国に入るんだったな。目的は？」

「国王に会いに来ました」

「……国王様にか？お前、なんか頼まれてる訳じゃねえよな？」

「いえ、あの森について話しがありました」

「そうか……まあ、危ない物を持ってないかの検査はさせて貰うからな」

そう言うのと門番は私に持ち物の検査をし、私にブレスレットのような物を付け、王国の中へ入れてくれました。彼の言う通り、この王国の人々は痩せ細っており、元気がありませんでした。そしてしばらく真っ直ぐと進むと古びた城が見えてきました。

「ここに国王様がいらつしやる。後、それは取るなよ？それを取っちゃったなら殺さなくちやならねえからな」

「ええ、分かりました」

彼は城の扉を開け、中にいる人に話をするのと来た道に戻って行きました。

「……門番より話は伺っています。どうぞこちらへ」

執事服を着た青年に案内され、私は国王が居るといふ王の間の目の前まで来ました。

「国王様、話がしたいという者を連れて来ました。通してもよろしいでしょうか？」

するとか細い声で『よい、通せ』と声が聞こえました。そして扉が開かれると……

「……………」

「な……………」

国王と言われたので煌びやかな衣装を身に付け、椅子に踏ん反り返っている物だと思っていました……全く違いました。ボロボロの服を着ており頬はこけ、今にも死にそうです。

「それで話とは……？」

「ええ、それなのですが……この国は食料が足りていないと聞きました」

「確かに我が国は元々植物が育ちにくい土地柄じや、だからこそ森の近くに畑を作り、食物を育てていたのだが……その畑まで枯れてしまった……」

「なるほど、だから森の中へと入ったと」

「それはこの国の貴族の強行手段じやが、ワシも止められなかったのじや……」

「確かに貴方達から見ればあの森は喉から手が出るくらい欲しいでしょう、ですが……」

「その森から追い出された動物達は どうするのです？」

そう王様に問う。すると

「し、仕方ない事じゃ」

「仕方なくありません。なぜ共存するという道を選ばなかったのです？」

「そ、それは…」

「……ダメですね、どうしても感情的になってしまおう…」

「もしか…其方はあの森に住んでいるのか？」

「ええ、住んでいました。少し旅をしようとして行き、今日森へと帰って見れば…動物達が殺させれていたんですよ…：…貴方に分かりますか？仲の良かった人と数日会わず、久しぶりに会ってみれば死んだという事を知った時の絶望が」

「それは…：…本当にすまないと思っっている。出来れば譲歩して頂きたい…ワシらにも時間が無いのじゃ…」

「ええ、貴方が言いたい事も分かります。では交渉というのはどうでしょう？」

「交渉ですか…？」

「貴方達には森の復旧を手伝って貰い、森の一部を畑として利用して貰い、その収穫の一部を動物達に分けて貰いたいのです。冬を越すのにも一苦労しますし、本当に一部だけくださればいいので」

「それでは私達の方が不利だと思っのですが…」

「ええ、その時の収穫量から引く分を決めますし、余りにも少ないようでしたら取りませ
ん」

「そうですか…では民達にその事を伝えましょう」

「ええ、お願いします」

《究極スキル【悲哀之王】^{アルティメット}を取得しました。魔王種への進化も完了しました》

そんな声が聞こえた気がしましたが気のせいでしょう。

こうして平和的に解決した私は、国王直下の騎士や農民達と共に森の復旧を始めまし
た。すると……

「おお……果物、果物だ！」

生き残っていた木から突如木の実はなりました。そして人一人分の大きさになると
プツリと農民や騎士達の目の前に落ちました。

「これは……森が私達に感謝しているのでしょうか？」

「きつとそうだ！よし、もっと頑張るぞ！」

『おおー！』

農民や歌騎士達、そして生き残った動物達。そして……

「この森を元に戻すのだな！力仕事なら任せるのだ！」

「キュイ！」

「ま、魔王ミリム!？」

「大丈夫なのだ! お前達は襲わないのだ! 一緒に森を元通りにするのだ!」

「ええ、お願いします。ミリム」

私はミリムにお願いしました。

「任せるのだ! それで何をすればいいのだ?」

「この灰だらけの土を掘り起こして、灰を被った土を中にするようにしてもう一回埋め直す必要があるのです。出来ますか?」

「任せるのだ! ガイアも手伝うのだ!」

「キュウ!」

ミリム達の協力もあり、森はたった3週間で元通りになりました。

「元に戻りましたね…!」

「うむ、とても綺麗なのだ!」

すると王国から走ってくる人が居ました。

「はあ…はあ…:大変だ! 王国にデカイ木が生えたんだよ!」

『えええ!』

驚く農民と騎士達。そんな彼らに私はこう言いました。

「ふふ、きつとこの森が感謝を込めて王国に木を生やしたのでしょう。それにこの森の

木はトレントですからね」

『トレント!?!』

「はい、何度かお話もしましたし。どうやら皆さんに感謝として枯れた大地をなんとかしてくれたようです」

「そうなのか……トレント! ありがとう!」

『ありがとう!』

そう言つて騎士や農民達はトレントへと感謝を告げるのを見届け、私は王国へと戻りました。

「おお! ファルス殿! 見てください!」

嬉しそうに言う国王が指差す先には……

「美味しい!」

「こんな木がいきなり生えて来るだなんて……」

「自然の恵みだ!」

その巨大な木から様々な木の実が落ち、国民達はそれを美味しくそうに食べていました。

「それに各地の貴族達の領にも同様に木が生え、恵みを与えて下さっておる……ファルス殿が何かしたのでしょうか?」

「いえ、私は何もしていません。貴方達が森を救った恩返しをしてくれているだけでしよう。……この木を大事にして下さい」

「当然ですとも、代々この木を大事にします。貴族達にもそう伝えます」

「ええ、ありがとうございます」

喜ぶ国民達の声を聞き、木は嬉しそうに葉を揺らしていました。

これは後々、『王国を救った伝説の木』として国民達に愛され、貴族達も自分達の領地に生えた木を大切に後世へと大切に残すようになるのですが……それはまた別のお話、というヤツですね。

「ファルス殿、頼みがあります」

「……何でしょうか？」

「貴方にあの森を納めて貰いたいのです。森の一部を畑として利用させて貰っていますし、誰かあの森を管理できる者が必要ですから」

「いいですよ。その代わり森での採取や狩りをする場合は要交渉、という事でいいですか？」

「当然です。我々にとつてもあの森は大切ですから」

こうして私は魔王となると同時に一つの国を救い、領地として私の住む森が与えられました。

魔王達の宴

「……立派な物を建てましたね」

「ええ、何せ貴方はこの国を救ってくれたのですから」

私の土地となった森に国王様は住む場所を作るといい、建てるための手配を始めました。すると国民達も協力し、たった半日で小さな木造の社ような物が出来上がりました。

「…このような物で申し訳ありませんが」

「いえいえ、十分ですよ」

「そう言えば、ファルス殿はここに住んでいるようですが雨風はどう凌いでいたのですか？」

「あそこの大きな木のウロの中で寝てましたね」

私はこの森で一番大きな木の根元にポツカリと空いた空間を指差す

「そうなのですか…これからは私達の建てたこの家を使って下さい」

「ええ、ありがとうございます」

「それでは…戻らせて貰います。お元気で」

「ええ、お元気で」

「なあ、お前。魔王になっただろ？」

国王達が去るとタイミングを見計らったかのように、ギイさんとラミスさん、ミリムが現れました。

「確かに、魔王種？というのにはなりましたが……」

「なら、お前はもう魔王だ。俺たちと同じくな」

「そうね、これからよろしく」

「ファルスもワタシと同じ魔王になったのだ！嬉しいのだ！」

そう言つて私に笑顔を見せる三人。

「ええ、これからよろしくお願ひします」

「さて、本来ならここで魔王を名乗るに相応しいか実力を測るんだが……お前にその必要は無いな」

「……ギイさんと戦つておいて正解でしたね」

「……ああ、どつちかというところと今のお前と戦つてみたくてウズウズするがな」

「…やめて下さいね?」

「ああ、それとアンタ、しばらくしたら勇者が貴方に挑みに来るわ」

ラミリスさんはそう言います

「勇者ですか?」

「ええ、魔王が生まれた時には勇者も生まれるわ、だから注意しなさいね」

そう言つて真剣に私を見るラミリスさん

「分かりました、気を付けます」

「よろしい、それじゃあ魔王達の宴を始めましょうか!」

「魔王達の宴ですか?」

私はその聞きなれない単語に首を傾げました。

「ああ、魔王達の宴って言つてるけど。そんな堅苦しい物じゃないわ。言わば私達の間

で行う世間話みたいなものね」

「はあ…」

するとラミリスさんは私にグツと近寄り

「さあ、貴方の事、全部吐いて貰うからね!」

「えっ」

「ああ、暴走したミリムを止めた力にガイアを鎮め、転生させたその力についても聞かな

きやならないからな」

そう言うときギイさんは私の肩をガツチリと掴みました。これでは逃げられません
「み、ミリム！助けて下さいい！」

私は最後の希望であるミリムに助けを求めますが…

「私もファルスがどうやって生活してたのか気になるのだ！早く話すのだ！」

希望はありませんでした。

その後は住んでいる森の事、そして動物達の事やその知識など洗いざらい吐く事になるのですが…長いですし、思い出したいありませんのでここでは言いません。

そして私は一人の魔王として世界に君臨しました。そしてその数週間後に王国の兵士から連絡が来しました。

——勇者が貴方を討ち取りに来た、と

勇者襲来

私は勇者が来るのを待つ事にしました。

「……か、魔王……」

すると煌びやかな鎧、そしてレイピアを携えた少女が来ました。どうやら彼女が勇者のようです。

「ええ、確かに私が魔王です。貴女は？」

「私はデイルフィンナル王国から来た勇者ルナ！お前が王国の人々を洗脳し、我らに反乱させると聞き討伐に来た！」

「いえ、彼らに洗脳なんてしてませんよ？」

「あの木から放たれる邪気を使ったのでしよう!？」

「あの木はそもそも私が生やした物ではありませんし、そもそもあの木はトレントです。邪気なんて放ちませんよ？仮にそれが出来たとして私に何のメリットがあるのでしよう?！」

「そ、それは……人間達を滅ぼそうと……」

「いえ、私はこの森とあの王国に危害を与えない限りは他の国に対して何かするつもり

はありません」

「う、うう……」

何故か泣き出しました

「あの、私がか悪い事しましたか？」

「う、うるさい！私に倒されろおお！」

するとレイピアに光が集まり始めました。

「あの、申し訳ないのですが」

「なんです!?今から貴方をぶつ殺しますからね！」

「私と戦うならこの森の中ではやめてもらえませんか？森に危害を加えたくありませんし、この近くには王国の畑があります、私達の戦闘の余波で作物が荒らされては彼らも困るでしょう」

「……それもそうですね」

レイピアから急速に光が無くなって行きました。

「では、少し行つた先に荒地がありますので、そこで戦うというのはどうでしょう？」

「……分かりました、貴方を討つのは決定事項ですが、無闇に民に危害を加えたくありませんし」

そして荒地へと移動しました。

「喰らえ魔王！」

着いて早々に先制攻撃されました。

「おっと」

私は紙一重で躲しました。

「不意打ちのはず……」

「ええ、びっくりしました」

「くうう……なんですか貴方！」

どうやら攻撃を躲されたのが悔しいようです。

「魔王です」

「ええ確かにそうですね！私が言ってるのは何故不意打ちを回避出来たのかです！」

「何となくですよ」

「もういいです。ぶっ殺します。全力で！」

するとレイピアに先程の倍以上の光が集まりました。

「あの、それを放つと私の後ろまで被害が及ぶのですが？」

「うるさいですね！貴方が全部受け止めればいいでしょう!？」

「明らかに受け止められないと思いますが…」

「なら根性で受け止めてください！というか私も想像以上に力が集まって困惑していますからね！」

「なら途中で止めればいいのでは？」

「これを止めたら私が衝撃で木っ端微塵になりますよ！」

「分かりました、なら早く放つて下さい」

「ええ、分かっていますし。そもそも貴方を殺す為ですからね！いけ！【光神斬】！」

レイピアの先端から私を覆い尽くしても足りない程の光が放たれました。

「これを受け止めなければならぬですよね…」

私は何とか抑えようと全身で受け止めますが、やはり一部は私を通り抜けて行きますし、そもそも光で全身が焼けて痛いのです。

「ぐ、あああー！」

それでも何とか受け止めました。…後ろの被害には目を瞑りますが

「あの、大丈夫ですか？」

勇者のルナさんが倒れてました。

「こ、【光神斬】は自分の持つ力を使って放つ必殺技……撃てば威力は絶大ですが、代わりに動けなくなります」

「それじゃあ私を倒した後どうするつもりだったんですか……その姿じゃ恐らく立ち上がれないでしょう？」

「うう……起こして下さい」

私はルナさんをおんぶして森へと帰ります。

「貴女はしばらく休みなさい」

「うう……回復したらまた戦いますからね！今度こそ貴方を殺しますからね！」

「ええ、楽しみにしておきます」

「きい！絶対貴方を殺してみせます！」

その後、ルナさんは回復した後、国へと帰りました。彼女を休ませた場所には紙が落ちており

「今回は負けましたが次は仲間達を集めて挑んでやりますからね！覚悟しておくといいですよ！」

と書かれていました。

そして一週間後、仲間を引き連れて私を殺しに来たルナさんは

「さあ！仲間は集まりました！今度こそ、貴方の最後です！」

と意気込み

「なんで倒れないんですかああー！」

息切れた仲間達と共に帰りました。

私ですか？そこそこ怪我を負いましたよ。一晚寝たら治りましたが

そこから一週間に一回のペースでルナさんと仲間達は私を殺しに来ました。その度に私も怪我を負い、ルナさん達も強くなっていききました。

そしてそんな事を繰り返したある日。

「……魔王さん」

「ええ、なんででしょうか？ルナさん」

「私、最近思ってたんですよ。貴方は魔王と呼ばれていますけど実際会ってみればただの優しい人。……王国で聞かされた話とはまるつきり違います、あの時だって私が倒れた時に殺せたはずなのに……」

「私は人を余り殺したくはありません。……被害を受けたなら別ですが」

「そうですか……あーあ、仲間との連携を生かして戦っているのにどうして勝てないんですし……」

「それでも貴女達は着実に強くなっていますよ。私も何度かヒヤリとした場面がありますし」

「……本当ですか？」

「ええ」

「…ふふ、やりました。この調子でいけば貴方を殺せるかもしれません」

「ええ、ですが私を殺した後はどうするんですか？」

「魔王さんを殺した後ですか？そうですねえ…考えた事がありませんでした」

「その腕を生かして冒険者、というのになるのはどうでしょう？」

「……うーん。私、勇者になる前は普通の村娘だったんですよ。その時の夢が料理屋をやりたいつて思っていましたし…」

「料理屋ですか……」

「はい、仲間たちももう危ない事はしたくないって言ってますし、みんなで料理屋をやるうって私提案したんですよ」

「それで返答は？」

「みんな喜んで承諾してくれました」

「そうですね…なら頑張つて私を殺さなければなりませんね」

「…でもこうして話していると貴方を殺していいのか…と迷ってしまうんです。私、やっぱり王国の国王様に言つて討伐を取り下げて貰おうと思うんです」

「何故ですか？そんな事をすれば貴女や仲間達にも被害が及びますよ？いえ、それだけではありません。貴女や仲間の家族にも被害が出ますよ？」

「……うう、やっぱり貴方を殺すしかないんですね。いい人なのに……」

「情を持つてはいけませんよ？もしかしたら私が貴女を誑かしているのかも知れませんが……」

「……ふふ、そうかもしれないですね。ですけど貴方はそんな事をする人とは思えませんよ」

「そうですか」

「ええ、それではまた明日、貴方に挑みますからね！」

そう言つて仲間達を引き連れて帰つていくルナさん。

しかしこの日以降、彼女と仲間達が私の元へ訪れる事はありませんでした。

悲しみの再会

ルナさんが来なくなってから、世界は変わりました。私の近くの王国は栄え、商業の国となり、人々も幸せに暮らして居ました。

勿論、ギイ達との関わりも増えました。ミリムはちよくちよく会う頻度が増え、ギイさんとの組み手もやる事が多くなりました。ギイさんには加減して貰ってますが…

そうして時が経ったある日、懐かしい人が森を訪れました。

「魔王…さん…」

ルナさんでした、あの時別れて以降全く姿を見せませんでした。私の見た時と変わらず若いままでした。

私は古い顔に会えた事に嬉しくなりルナさんを笑顔で出迎えます。

「どうしたんですか？ルナさ…」

腹部に鋭い痛みが走りました。ルナさんが私をあの時と同じレイピアで刺したのです。

「魔王さん…にゲて くださ…わたし 壊れ 操 …」

「っー」

私は距離を取ると再度ルナさんを観察します

よく見るとあの時のルナさんとは変わっている点がありました。腕に謎の模様があり、そこから何かが送り込まれて居ます。

「な ま…み な…やられて …捕まっ 助けたかつ…」

「ルナさん…」

ぽつぽつと溢す言葉は…後悔でした。

「ま…お…さ…わだ…しを…」

涙で顔を濡らし、救いを求めるような顔で…ルナさんは…

——私を…終わらせて下さい…

そう呟きました

「わだじは…私は…アアアアアア！」

そう叫ぶと大地を抉る速さで私に肉薄し…

「くっ…」

私も防ぎますが遅かった…腕を切り飛ばされ、そのまま蹴りで吹き飛ばされます。私は森を抜け、あの時と同じ荒野へと身を転がしました。

そしてその切り飛ばされた腕をルナさんは拾い上げ…まるで愛おしい誰かのように

優しく撫でます

「あハ…魔王さん…」

あの時とは比べ物にならない程、ルナさんは強くなっていました…

私の腕を一通り撫で終えたのか腕をポイと投げ捨て…私と一気に距離を詰めました。

「ぐっ…!？」

「あハは！マおヴさん！私は強くなりましたよ！」

そう言つて、ルナさんは狂刃振るいながら笑います。悲しみとぐちゃぐちゃになった顔で私に笑いかけます

「まおうさんにあのいちげきを見せてあげますよ」

狂刃を躲し距離を取った私にそう笑いかけるルナさん

「唸れ…迸れ…」

レイピアにあの時以上の光が集まります…あの時受けた『光神斬』は私を焼きました
が…

「マ うさん…この一撃デ…倒れナイで下さいね？」

そう言つて笑いかけたルナさんはレイピアをゆっくりと構えました…光神斬じゃない…？

「あはっー！」

「くっ……」

振るわれたレイピアの光は私を掠め天へと昇ります。その光はまるでルナさんのように美しく……そしてか細く儂い

「さア……マおウさん……私とイツしよに……踊って下さい」

涙は枯れ、苦しむような顔で……それでも口は歪んだ笑みをして……ルナさんは切っ先を私へ向けました

運命への反逆

「あハはハはー」

ルナさんはレイピアを振り回す。その度に光が飛び、大地は抉れ、岩は砕かれ、私の身体はボロボロになる。

私とルナさんがかつて何度も戦った荒野はこの戦鬪でより一層荒れた。

「アハ…カフツ…」

ルナさんがピタと止まれば、その口から鮮血が滴る。

もう荒野での戦鬪が5時間を越えている。ルナさんがいくら勇者だと言えど、命を削るような戦鬪は彼女の肉体と命を確実に刈り取っている。

私は考える。

何が最善であるかと

ルナさんは後1時間程経てばその命を使い尽くし死んでしまう。

——ならせめて、ルナさんが望んだように私の手で殺すしかないだろう

そう浮かんだ案を私は掻き消す。

「隙だらけですヨ！」

ルナさんは私に肉薄しレイピアを振り上げる

私は片目が見えなくなつた。

ああ、もう時間がない

どうすればいい

どうすればいい

どうすればこの子を救える

どうしたらこの子を助けられる

そうして考えている間にも、ルナさんによつて尾の一つが切り飛ばされる。

「あハ……まおうさん？どウしマシタ？動きが鈍くてつまらナイですヨ……」

口ではそう言いつつも、ルナさんは斬り飛ばした尾へ歩みだし、その尾を大切そうに撫で始めた。

……ルナさんの動きはチグハグだ、まるで身体をバラバラにされた上に無理矢理ツギハギにされてそのまま動いている人形のように、行動と言動が一致していない。

私はルナさんの最初の言葉を今一度思い出す。

「魔王さん……にゲて くださ……わたし 壊れ 操 ……」

「な ま……み な……やられて ……捕まつ 助けたかつ……」

そして最初に見た時に腕に浮かんでいた謎の模様

…これは

「…誰かしらに操られている…という事ですか」

私は、やっとその結論に辿り着けた。

そして、私の持つ知恵では救えない事も、理解した。

その時、ふと思いつく

そう、確か魔王となったあの時…

《アルティメット究極スキル【アリエル悲哀之王】を取得しました》

そう、あの時私は何かしらのモノを取得した。

それを今、使う時ではないのか？

「…ルナさん、貴方を助けます…」

「助けル…？何を…？私ヲ…？あ…ア…」

すると腕にある模様が煌々と紫色に輝く

「アアアアアア!!!」

爆発するように紫の光は辺りを包んだ。

「…助けテ…殺しテ…ワタしは…もう…ダレも…失いたくない…」

そこにはルナさんではなく、化け物が居た。

風貌は巨大な身体に剣と盾を持ち、漆黒の鎧に身を包んだ騎士と言ったものだ。

漆黒の騎士を思わせる鎧の丁度胸の辺りにルナさんの顔がある。

そしてその上にはこちらを憎むかのような『紫色の瞳』が顔の代わりに無数に存在していた。

『魔王が、救うなどと抜かすな…勇者に大人しく殺される』

「勇者が魔王を倒す運命と誰が決めたのです」

そう呟いた時、ズキリと頭に痛みが走る

暗い場所

楽しく笑うダレカの声

退屈な『内側』

『外』に出たい

『私』もそこに居たい

そんな『知っていたような記憶』を今は消す

「…ぐ、貴方が邪魔をするのなら…！」

私の身体はボロボロだ、ルナさんの攻撃によって片目と片腕を無くし、尾も11本あつたが今では4本。

勝てるだろうか

違う、勝つのだ。

「私は…運命あなただを倒して、

《運命強への反逆意を確認、

ルナさんを救います…!」

究極アルティメットスキル悲哀アリエル之王を発動させます》